

IR cures ILL

**領域2 「学術情報資源共有のための図書館間文献デリバリーサービスを
機関リポジトリ構築によって代替するための教員・図書館連携方式の開発」**



鈴木雅子(小樽商科大学)

ircuresill@office.otaru-uc.ac.jp

プロジェクトのテーマ

- IR構築と、伝統的図書館活動との相互運用
- (背景)電子情報流通の進展、研究情報入手環境の向上、ILL発生は減衰
 - IR登録文献の拡充によるOA加速は、さらなるILL抑止につながるのでは？
 - また逆に、繰り返されるILL発生を機関リポジトリの拡充に結びつけるには？
- 総合的な文献供給パフォーマンスの向上のために、誰が何をしていけばいいのか？

潜在的な文献需要への予測対処

所蔵館A

依頼館D



コピー・送付



所蔵館B

依頼館E



コピー・送付



所蔵館C

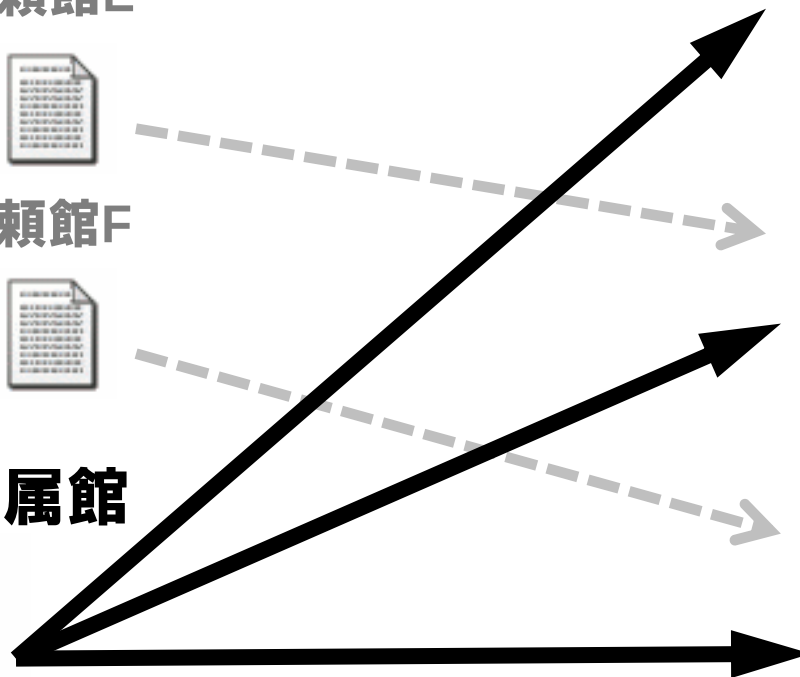
依頼館F



コピー・送付



著者所属館



平成20年度の活動

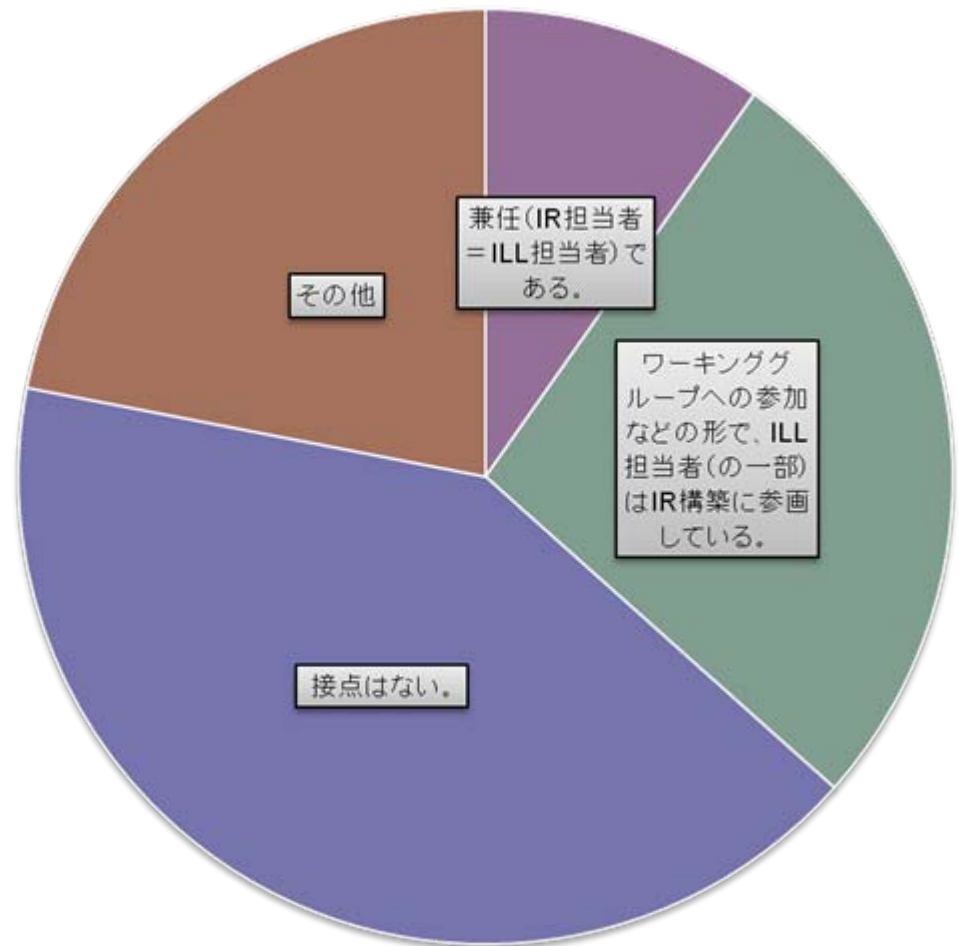
平20.10	DRF地域ワークショップ(広島)分科会主宰
11	IRcuresILLアンケート
	Berlin6会議へのポスター出展
	SPARC会議への口頭発表出展協力
	第4回DRFワークショップ分科会主宰「デジタル時代の文献デリバリー: ILLはどうなる? IRはどうする?」
12	IRcuresILLアンケート中間報告書公開
	DRF地域ワークショップ(山形)分科会主宰
平21.1	DRF地域ワークショップ(大阪)分科会主宰
	NACSIS-ILLデータ分析
2	IRcuresILLアンケート中間報告書(英語版)公開

IRcuresILLアンケート

- IR/ILLの概念融合、相互運用への意識喚起
- 両業務担当者からの意見収集
- 平成20年11月6日～21日
- DRF参加機関(86機関中、55機関回答)
- 中間報告書
<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?IRcuresILL>
- ご協力ありがとうございました

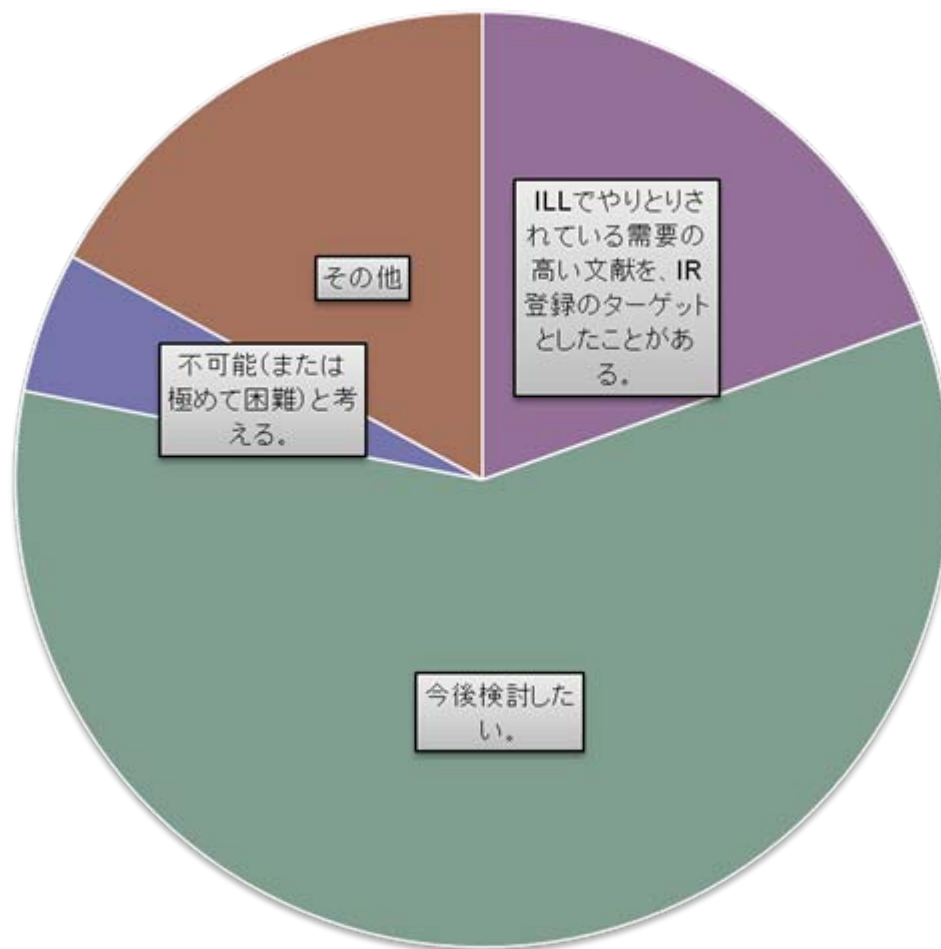
IRとILL、業務上の接点は？

- 貴IRは、ILL担当者
と業務上の
連携・接点があり
ますか？



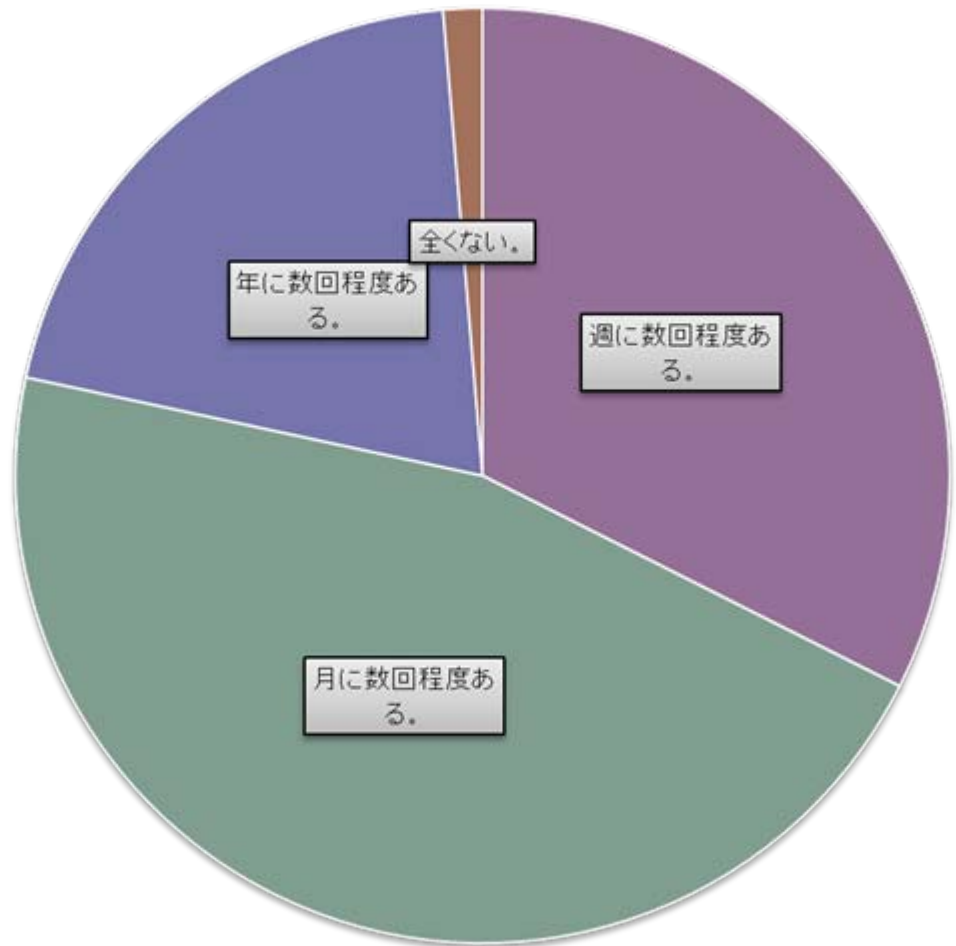
実際に求められるものをIRへ

- 所属研究者の著作文献のうち、ILLで実際にやりとりされている高需要文献を、優先的にIRに搭載する、ということについてどう考えますか。



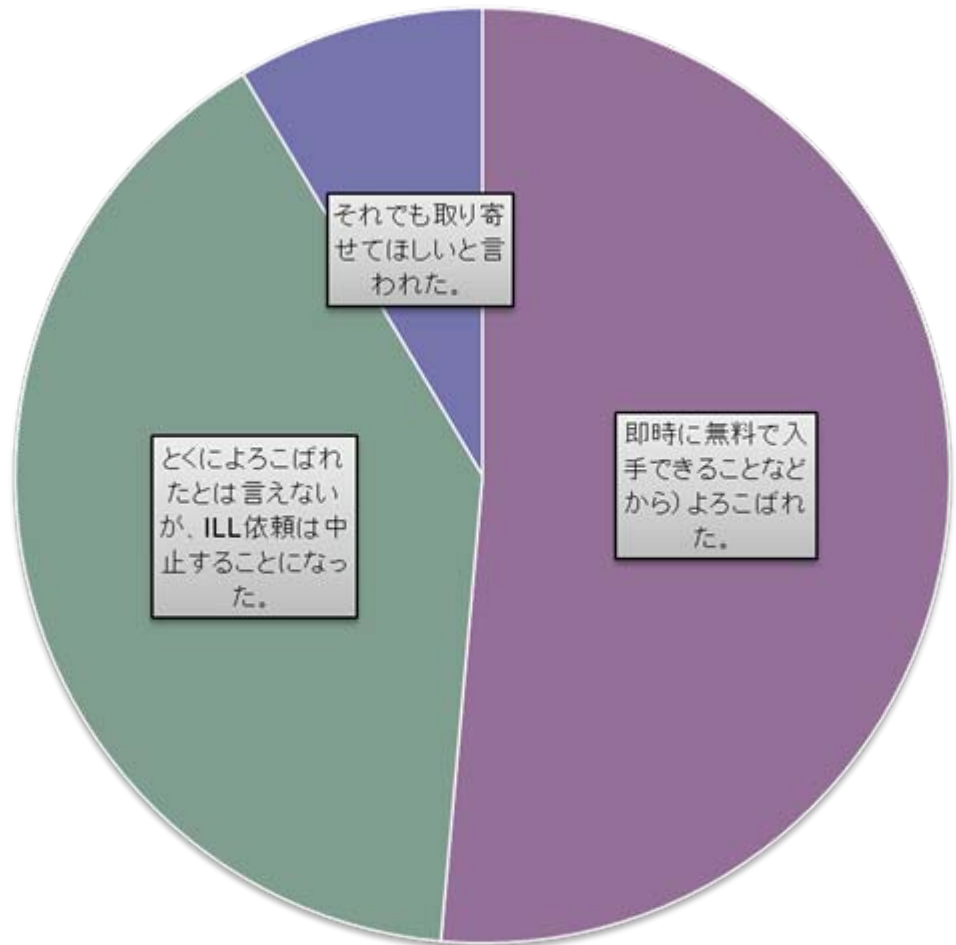
結構ネット上で見つからない？

- 利用者からILLの申込があったが、ネット上でその論文を無料入手できたことがありますか？（契約中の有料EJで見つかった、等のケースは除く）



それにこしたことはない

- それをお知らせした際、申込者の反応はいかがでしたか？



自由記入意見

詳しくは
ポスター
で!!

加速すべき。

「OA文献の増加」状況は望ましいものと思われますが、「研究者の研究活動およびILL業務」への影響は判然としておりません。貴プロジェクトには期待しておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

OA文献が増えることはよいと思います。

本学の場合、文献複写依頼件数が減少傾向にないとの状況であるが、今後文献複写依頼件数が減ることになれば大変助かるものと思われる。その参考調査や利用者教育に時間をかけることが可能となる。本学においては、まだまだIRを含めOA文献のIR広報を含めOA文献の状況を広報する必要がある。また、ガイダンス等において積極的にOA文献のことも取り入れていく必要があると思う。

OA文献が増えれば、研究者は必要ない文献をすぐに入手出来ることになるので、良い環境になるのではないだろうか。さらにILL業務の軽減が図られます。

OA文献の増加によって、利用者がILLを利用しなくても無料で文献入手出来るということは周知の事実ですし、より理想的な方向に進んでいると思います。統計上では国内ILL文献複写発生数が減少しているため、ILL業務量も減少と思われるが一方でこれまでないILL担当者による利用者への適切な指導、若しくはCINIIやIR等の地道な宣伝活動といった業務があり、ILL担当者の担う役割及び業務内容が、ここ数年で大きく変わりつつあるなどと思います。

ILLでやり取りされている論文をIRに登録することができれば、IRの論文件数の増加及びILLの作業省力化につながり、IRとILL業務が密接に関わることになる。そうすることでIR担当者とILL担当者が協力し、IRを活性化することができれば望ましい。

ILLより時間的、金銭的に制約の少ないOA文献にシフトしていくのは当然です。ただし、著作権等の問題でOA化できないものも多くあります。電子化にこだらなければ、ILLを利用して(小規模大の無料ILLのように)よりOA的な方法で公開することができます。規模は縮小しても、電子ジャーナルやOA文献を補完するという役割がILL業務にはあるのではないかと思います。

今後の趨勢として、研究発表の形式が紙媒体から電子媒体へ移行してゆくのは間違いないと思われるので、紙媒体を前提としたILLの件数が減少するのは当然であると思う。

概要欄についてはその通りで、IRに自大学発行の紀要(誌面を電子化したもの)を入れていくことには大きな意味があると思います。上の2. の回答はこれにあたります。ILL減少の原因が(契約料の要る)電子ジャーナルによるものとOAによるもの、どれくらいの割合になるのか、分かれれば興味深いです。

複写発生数がIRによって抑えられることは大変望ましいことと思います。より早い情報の提供を実現していると考えられます。各IRに収録された情報が一括検索等により研究者にも職員にも探しやすい状況が構築され、いっそう情報の流通を活性化することができればよいと思います。

ILL文献複写発生数の減少は電子ジャーナルの急激な普及が資するところ大であるが、これは依然として予算に恵まれた研究者がILLを利用しなくて済んでいる状況を示しているに過ぎない。真に望ましいILL依頼減少の実態はOAの普及浸透によってもたらされなければならない。まだまだOA文献は数が少ないこれがを一層増加させ、学術情報の入手に現在のようにコストがかかる状況を異常だと研究者が感覚するのが通常とならねばならない。研究者の自覚を強く導くためにILL依頼実績のある文献についてその故に著者に説いてIRに搭載する試みは極めて有効な手段と謂える。単にIRに文献を搭載していく、利用するに便する仕様を実装する、等の工夫はそれぞれに成果をあげることが期待できるが、戦略の主眼は研究者のOAに対する興味をいかに惹くか、OAが必須且つま自然であることをいかに研究者に理解させるか、にあると思う。

OA文献の増加は大変好ましい傾向にあると思われる。私立大学の図書館では専任職員数が減少し、また、図書館員の一般事務職員が人事異動で配属される状況になっている。委託業務が推進される中で、従来になかった業務を立ち上げる事は非常に困難である。IR収録文献増強への取組みは、できるところから少しずつという形で、むしろ現行の業務負荷を軽減し、余裕を作り出した範囲で取組まない。また、ILL業務においてもOA文献を取りこぼす事が無いような手順を考えていく必要があると考えている。

良いことだと思う。既知のことだが、ILLのリクエストは看護系の雑誌が多いため、看護系の学部を持たない本校のような場合は、貢献できるという期待をあまり持つことができないため、ILLとの協力ということを推し進め辛い。しかし、ILL担当部署とは全く情報交換をしていないため、調査をしてみたいとは考えている。

OAにより入手可能になると、ILLを経ずに済むため研究者にとってメリットがある。さらに、これまでならILLまで至らなかつた潜在的利用も開拓される。一方、ILLでしか入手できない文献を参照することは、研究者にとって、以前よりもさらに億劫な作業とみなされるようになるのではないかと。したがって参照されるべき文献は、図書館での複写やILLにより入手しなければならない状態から、OAで入手できる状態に移行することが望ましい。

ILL業務は非常に手間・コストがかかるので、限られた人員でより充実したサービスを、図書館が今後も提供し続けるためには、良い傾向と思う、促進していくべき方向だと思う。もしIRとILLがうまく連携している図書館があるならモデル図書館として、全国の図書館に教育・啓蒙活動をお願いしたい。

文献へのアクセスがスピードアップし、ひいては研究者のスピードアップにつながる可能性はあるかと思う。本学紀要へのILLリクエストは現状ではほとんど無いので、紀要のIR登録は今のことかうまく業務へ影響を与えていないようです。ILL業務の減少は、他業務が各種増加している昨今において、とても有益な状況と言えると思う。また、研究者自身にとっても、時間にとらわれず文献を入手できる環境にあることは、その研究活動が円滑に行われることが容易に想像できると思う。

図書館員としてはOA文献が増加し、ILL文献複写件数が減少すること、本学のIRにも必要ない論文を積極的に登録したいと考えている。(ただし、研究者の立場での著作権保護の問題があると思うが。)今回のアンケートと直接関係はないが、IRの収録文献数がCINIIに匹敵する規模になってきたこと、CINIIとIRの相互連携について、現状よりもさらに簡便なる仕組みを検討していただきたい。

IRに掲載されることによりILL作業が軽減されることは良いことだと思います。学内紀要については発行大学のIRに全て掲載されること望ましいと思いますが学部等の総意が必要になると思います。当大学は過去分に関して著者の許諾が得られたもののみを掲載している現状です。

OA文献が増加することは良いことだと思うが、著作権処理、電子化作業、Web上での公開作業など、OAに至るまでの作業負担が大いだと思います。

IR担当者の立場からは、好ましい状況であると思われるので、直接利用者と接することの多いILL窓口と連携して、IR登録を推進していきたい。

IR収録文献の増加によりILL件数が減少することは、研究者の情報入手と、図書館業務の省力化や費用削減等の両面で好ましい状況だと思えます

OAによってILLが減少し、余分なコストが削減されることは喜ばしいと思います。その一方、「所属研究者の成果」を収集するという性質のIRが、ILLの要求に対してどこまで効果があるのかまだ疑問であるので、今回のアンケート結果にも注目しています。

ILLが減って、利用者が自分で文献を手に入れるのはいいことだと思う。

より早く、より簡単に、文献を手でできるようにすることは、研究活動にとっては無条件にプラスだろうと思います。大学図書館は、電子ジャーナルの提供、ILLでの文献提供、OAの推進、とそれぞれでの活動によって、相互に補完してより豊かな学術情報の流れを提供できればいいと思います。特に、電子化が遅れている、日本語のジャーナルについては、私たちがIR事業が電子ジャーナル化で役立てるのではないかと思います。大学費の概要欄や報告書類は大学がOAで提供するという流れが定着すれば、研究活動にとっても、わかりやすく有益ではないでしょうか。

良い状況であると思う。

研究者が希望する文献が、研究者自身の手によって即座に入手できるというのは素晴らしいことだと思います。ILLを仲介することによって、情報の伝達ミスや、様々なアクシデント等のため、文献の入手が遅れてしまうこともありますが、それらを解消する画期的なサービスだと思います。また、将来的にはILL業務担当者の業務が軽減される可能性も含んでおり、その際にはこれまでILL業務に費やしていた労力を新たな図書館サービスを展開させる一助となりえる可能性を秘めているものと思われます。

ILL業務の中で「人間リンクリソルバ」的な業務量が増えてきている。省力化の観点から、「本学のリックリソルバ」を調べた後、ILL依頼を行ってもらうという流れを作る必要があると思う。・ILLの世界での「人気アイテム」をIRに反映させるという試みは、研究者・図書館員双方にとって有効だと思う。ただし、今後は発行権者がOAまたはIRで公開しないものがさらに増えると思うので、「ILLからIRへ」という流れで登録できる件数は、段々と少なくなる気もする。・NACSIS-ILLで依頼を行う際に、「ボタンを押すとIAIROを自動検索」という仕組みをNIIで用意して頂けると便利だと思う。・各大学研究者の業績について学外からILL依頼があった際、取りあらず電子化し、ILL依頼に備えて保存(公開できるものは公開、それ以外はターゲットアーカイブに保存しておくという運用が取れば、効率的な気がしますが、著作権法上認められないでしょうか?何より学内者かどうかの判断が難しいですね。

ILL 件数の減少については、OA文献の増加よりも電子ジャーナルの普及の影響の方が大きいと考えられるが、今後、OA文献の増加が、さらにILL 件数を減少させる可能性があることについては同意である。ILL 件数を減らすという意味では、実際にILL で必要のあった文献をターゲットにして登録するのは有効と思うが、紀要など、大学の刊行物の電子的な公開を促進するだけでも、かなりの件数を減らすことができるし、ILL 担当者やIR担当者の負担も減るのではないかとと思う。

図書館の発信する学術情報を利用され、その一方でその影響としてILLが減少することは、図書館が学術情報流通を創造的に実装することになり、大変意義の大きい活動であると考えます。

OA文献が増えたらILL依頼しなくても文献を手でできるようにすることは、研究者にとって大きいメリットになっていると思われます。ただ、OA文献が増加していくにつれて、例えば雑誌掲載論文など、雑誌・電子ジャーナルの販売に影響が出るようになった場合の出版社等の対応が多少心配になるところでは。

大変素晴らしいことだと思います。ILLとIRを関連付けよう考えることは、図書館が提供するサービスを総括的にとらえ、再構成を考えるとのかきかけになると考えています。とは言え、本学の場合、組織や人員、さらには職員の意識(文化)の問題が障壁となり、いかに実現していくべきか、その具体的プロセスがなかなか見えません。IRcoreILLでは、今回の調査結果などを踏まえた、IR-ILL連携実現に向けたモデルプランを提示したいだけだと、大変期待しております。

現状について、IR公開を促進することに繋がりが、OA文献の増加が広く周知されれば、研究者、ILL担当者にとって、有益なことだと思う。

当館では、レファレンスに調査依頼のあった文献(特に学術論文)については著者とコンタクトをとる機会が多いため併せてIRの登録を依頼することがあります。担当者がとして、必要の多い文献をOAにすることは本望ですが、(参考までに研究者の反応列挙:・著者の提供を依頼した時「何のためにILLという制度があるんだ」と言われたことがあるが、この研究者はたぶん自分がWebで文献を手でできることに異存はない。・需要の高い文献がOAと無償で持て行けるのは困る。)

IRでOA化して進捗の省力となる効率的なこととも思われます。(利用者がILLに申込み前にIRを検索するようになるまでは、各機関のコンテンツ登録の労力が必要となります)

図書館界にとっては大変ありがたいが、ILL業務自体が将来的にならなくなることが望ましいが、著者最終原稿という制約がある限りは期待できない。ただし大学の紀要についてはオリジナルのものもIRに登録できるので、まずはそのような大学オリジナルのコンテンツを優先的に登録していきたい。もう一つ、学術雑誌の登録もありませんが、日々の業務で感じることで、図書館はさらなるサービスの充実を求められている一方、徐々に職員数は減っている。図書館の中では比較的新しいIR業務が、これまでの図書館業務の見直しにつながり(まさにIRcoreILL)、より必要なサービスに人をさけるようになれば、IR担当としてもやりがいがある。

研究者には、欲しい文献を、無料で即時に入手できることになる。一方、図書館員には今までILL業務に費やしていた努力・時間を参考調査等の利用者サービス業務に使うことができる。

NACSIS-ILLデータ分析

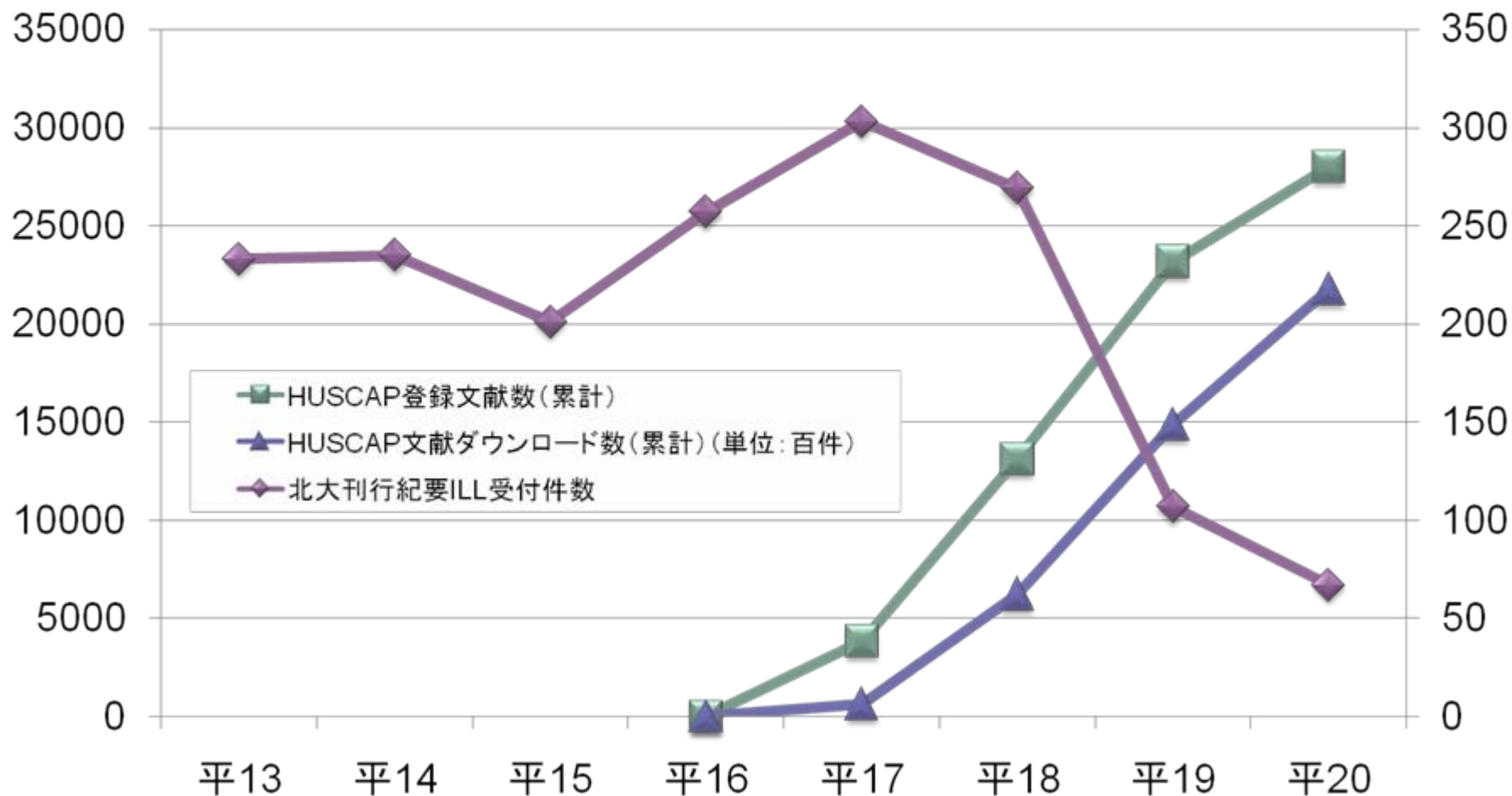
- 同一文献のコピーは全国でどれくらいあるのか？
- どのような文献が？
- 需要はどこにあるのか？（Reformによる分析の文献レベルの追試）
- IRコンテンツ整備との関係は？
- その需要はどのようにこなされているのか？

やっぱり看護系



直近1年間にNACSIS-ILLでやりとりされた文献標題に含まれる語によるクラウド

紀要へのILL依頼の減少(北大)



NACSIS-ILL高頻度文献トップ10

- **詳細は、当日会場で。**
 - **最も依頼の集中した文献はILL発生数が年間98回にのぼった。**
 - **新しい文献ばかりではなかった。**
 - **国内文献への需要が高い。紀要論文だけでなく、国内学会誌掲載論文の需要も高い。**
 - **所蔵館が少ない雑誌の掲載文献へのILLは多いが、そればかりではない。**

平成21年度活動予定

- **教員への広報・教員との連携**

- IR活動イコール教員との協力
- さらなる連携

例：インタビュー（北大、小樽商大、京大、筑大...）

IR掲載論文、著者、研究を紹介
＝教員との協力による大学広報



こんな連携
ができれば
いいな

- **図書館員への広報・意見交換**

- よろしくをお願いします！

プロジェクトのテーマ(再掲)

- IR構築と、伝統的図書館活動との相互運用
- (背景)電子情報流通の進展、研究情報入手環境の向上、ILL発生は減衰
 - IR登録文献の拡充によるOA加速は、さらなるILL抑止につながるのでは？
 - また逆に、繰り返されるILL発生を機関リポジトリの拡充に結びつけるには？
- 総合的な文献供給パフォーマンスの向上のために、誰が何をしていけばいいのか？

IRcuresILL アンケート 自由記述欄より

ILL文献複写発生数の減少は電子ジャーナルの急激な普及が資するところ大であるが、これは依然として予算に恵まれた研究者がILLを利用しないで済んでいる状況を示しているに過ぎない。真に望ましいILL依頼減少の実態はOAの普及浸透によってもたらされなければならない。まだまだOA文献は数が少ないがこれを一層増加させ、学術情報の入手に現在のようにかかる状況を異常だと研究者が感覚するのが通常とならねばならない。研究者の自覚を斯く導くためにILL依頼実績のある文献についてその故に著者に説いてIRに搭載する試みは極めて有効な手段と謂える。単にIRに文献を搭載していく、利用するに便なる仕様を実装する、等の工夫はそれぞれに成果をあげることが期待できるが、戦略の主眼は**研究者のOAに対する興味をいかに惹くか、OAが必須且つまた自然であることをいかに研究者に理解させるか、にある**と思う